

## 今井源衛・春秋会著『我身にたどる姫君』

後藤, 康文  
九州大学大学院 (修士課程)

<https://doi.org/10.15017/12006>

---

出版情報 : 語文研究. 59, pp.59-63, 1985-06-03. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

## △△紹介△△

### 今井源衛・春秋会著『我身にたどる姫君』

後 藤 康 文

文永年間にはほぼ成立を見たとおぼしい物語『我身にたどる姫君』は、直ちに原文と対峙してはその複雑な内容と文章表現の晦渋さとしばしば煩わされ、全篇を通読することの大変に困難な代物で、擬古物語全般に対する関心の稀薄さとも相俟って、従来専門家の間でさえ顧られることの少ない作品であった。ゆえにその研究状況は、この物語が探究に値する多様な問題性を孕んでいると思われるにも拘らず、未だ寥寥たるものであり、また厄介な注釈作業にも近時まで手が着けられないままとなっていた。

ところが、先般公にされた徳満澄雄氏の大作『我身にたどる姫君物語全註解』（昭和55年7月・有精堂刊）に引き続き、ここに紹介する今井源衛氏・春秋会著『我身にたどる姫君』全七冊が世に送られたことで、最早さような逼塞状態は打破され、この物語の注釈は、纒か数年のうちに無から長足の進展を遂げるに至った。今本書を読み了えた筆者の胸には、これで漸く問題児『我身にたどる姫君』の全貌が我々の眼前に明らかにされたとの感が深い。この難解無類の作品がここまで明快に解きほぐされたという事実は、まさに驚嘆すべき出来事と言えるだろう。以下早速具体的な紹介にはいらせてい

ただく。

まず、本書の特色について二点ほど指摘してみたい。その第一は、本書が「この作品は『難解』の定評にあぐらをかいて放置するには忍びない、それだけ高い文学的価値を荷ったものである事を世に訴えたいという」著者の「切なる願い」（今井氏序文）の下に出版されたという点である。ために本書は、一方で学術書としての高い水準を保持しつつ、同時に広く一般の古典愛好家をも視野に収めた、射程の長い書物となっている。その一端は少女コミックス風の軽便な装幀からも窺知できるが、何よりも特筆すべきは、この物語の上記初めでのしかも優秀な現代語訳が施されたということだろう。そもそもかかる難解な作品の注釈には是非とも現代語訳が必要なのであり、その達成自体極めて意義深い事なのだが、本書のそれは更に右の主旨に基いて、「原文に省略の多い主語などをつとめて補い、あまりに長い文は途中で切り、さらに時には、原文にはない必要最少限度の説明句を補足する」（序文）などの措置がとられ、「極力読みやすく分かりやすい」（凡例）形で提供されており、現代語訳が原文よりも前に置かれポイントの大きな活字で組まれていることとあわせ

て、一般読者への便宜が計られているのである。つまりは、訳文だけを辿っても十分に作品の全容が把握でき、ひとりでも多くの人がこの物語の世界に参入する楽しさを味わえるよう配慮されているわけである。

第二は、本書が輪読会の所産であるという点。輪読会という衆知を集める形式が、注釈作業—とりわけ本物語の如き険阻な処女峰を極めんとする場合—の上でいかに有効なものであるかについては、改めて述べるまでもあるまい。個人の力ではどうにも不明な箇所が甲論乙駁の果てにふと解決を見たり、思わぬ失考がきっちり訂正されたりすることにより、そこにはすぐれた成果が齎らされることになる。今井氏も「総じてこのすべての結果が、文字通り各回輪読会の討議に依ってはじめて生まれたものであること、今さらいうまでもない。この作品の読解は、とうてい一人単独では果し得ない底のものであることを、あらためて今痛感しており、その点我々はいへん幸福であった。」(序文)と述懐しておられるが、本書が独力の注釈にありがちな死角や盲点を殆ど含まない、大変完成度の高いものに仕上がっているのは、一にも二にも春秋会という無影燈の威力による。

次に、内容・構成に関してひと通り触れることにしよう。本書は、大きく第一冊から第六冊までの本篇と、第七冊の評論・資料篇とに分かれる。まず本篇では、原作全八巻が一卷乃至三巻ずつ各冊に収められ、各巻には適宜章段が設けられて、各段ごとに現代語訳・整定本文・語釈の順で注釈が施されている。うち、現代語訳については先に述べたので省略するとして、本文は、現存する三伝本の中で最善本と考えられる尊経閣文庫蔵本を底本とし、残る二本(金子武

雄氏蔵本・宮内庁書陵部本)を以ってこれを厳密に校訂したものを。

そして語釈は、訳文で代替可能な語義語法の説明を極力排し、引歌引詩の出典を考証し先行物語の影響を指摘すること等に重きが置かれているほか、内部関連の把握にも意が用いられており、簡潔で必要十分なものとなっている。更にここで特記すべきは、語釈の随所に、単なる文字面の解釈を越えて生身の人間そのものを見据える著者の、深くかつ自在な「読み」が鑲められているということである。たとえば、前斎宮の「隙なきひのくま川の巻きかくるやうなる」(87頁)行為に相手の源中将が閉口する巻六の一節では、引用部分について、例の「ささの隈」云々の歌を挙げたあと、「『日のくま川』に『熊皮』をかける。熊皮は女陰を暗示する。(中略)『巻きかくる』の『まく』は腕を巻きつける、抱きしめる、共寝する、の意。前斎宮の閨房の痴態をいう。」(88頁・【訳釈】(17)―ちなみにこの現代語釈は、「休む暇もなく毛の密生した熊の毛皮で抱きしめるような」―)と鋭く洞察しているし、或はまた、悲恋帝に処女を奪われた皇太后宮が、その翌朝前夜の「濡れたる御衣など」(106頁)を取り隠す巻七の一場では、これを「新婚初夜の痕跡をのこしている寝衣である」(106頁・【語釈】(6)とし、「濡れ」ているのは、涙のためだけではあるまい。)(【語釈】(14)として、彼女が夜衣を隠さねばならなかった理由を十全に看破している、といった具合である。筆者の趣味による偏頗な例示となって心苦しいが、ともかくもかかる紙背に徹した「読み」の存在が、本書を豊かなものに行っている。本篇にはこのほか、よく纏められた全巻の〈梗概〉(第一冊)、現時点における最高水準の研究成果を盛り込んだ〈解題〉(第一冊—今井源衛氏執筆)、主要登場人物の関係が一目で判る〈系図〉(各冊—

なお、ここで主要人物に登場順による背番号が付されているのはユニークな試みで、この措置によって本物語の錯綜した人物関係が把握し易くなっている。巻ごとに紛れ易い人物の別称を整理した〈主要登場人物各巻別呼称一覽〉(第三二六冊)が付載されており、それぞれ有益である。

続いて、評論・資料篇の内容は左に掲げるとおり。『我身にたどる姫君』を讀んで(瀬戸内晴美・後藤祥子・洪澤龍彦各氏)、異同・校訂一覽(工藤重矩氏)、年立(田坂憲一氏)、研究史(辛島正雄氏)、索引(登場人物(古賀典子氏) / 本文要語 / 語釈事項(以上武谷恵美子・田坂順子両氏) / 和歌各句(正木光恵・下山礼子両氏) / 主要登場人物各巻別呼称一覽(古賀典子氏)、出典一覽) / 和歌 / 散文 / 漢詩文・仏典 / 歌語・用語、(函録(以上福井迪子・西丸妙子両氏)。これらが一括され別冊仕立になっている点で実際の使用上大変有難いが、中でも〈研究史〉は、今日までの研究状況が一望されて便利であるほか、従来未公開であった大野木克豊氏の尊経閣文庫本解題稿本(明治44年)全文を収録して貴重。また〈索引〉及び〈出典一覽〉は、ひとり本物語の研究においてのみならず、その他種々の作品研究の上にも大いに役立つであろう。以上が本書の概要である。

『我身にたどる姫君』物語の注釈は、本書の出現によって遙か不高みに到達した。そして、ここに打ち立てられた解釈の根幹は将来的に殆ど揺らぐことはないであろう。しかし細部を見渡せば、無論この秀逸な書物にも些少の瑕瑾は認められる。今、筆者の判断では明白な誤謬もしくは自家撞着と思われる箇所のうちいくつかにつき極簡単に指摘してみると、巻三第五段の「月もほどなく立ちぬれば、

また神事に出でさせたまふを」(122頁)云々の条で、現代語訳及び語釈は女三の宮の退出を十一月とするが、ここは本書年立(65頁)及び『全註解』(101頁・【注釈】(9))の六月が正しい。巻四第十七段の「大将」(101頁)を、語釈が「右大将。女四宮の夫。中宮の父」(語釈【5】)と注するのは誤りで、「中宮の兄」(101頁・【注釈】(19))と

とる『全註解』是。巻六第七段の「また恥づかしき事もこそあれ。見よや」(58頁)という前齋宮の言葉における「見よや」の意味は、直前の「もこそ」との関連を重視すれば、「女房たちが信用しないらしいので、『き』とそうなるから見ていろ」の意。【語釈】(18)ではなく、単に「監視せよ」くらいに解するのが穩当(ちなみに『全註解』は、「今夜だれが来るか見ていよ。」(394頁・【注釈】(33))。巻七の、悲恋帝の三度目の三条院行幸を挟んだ二つの言、「院にもなほさぶらひなれては、いみじう残りたることのみ多くはべり。なほいかで」(第11段・88頁)と「さぶらひ馴れでは、さらでだにおぼつかなく思ひたまへらるるを、いかばかり」(第14段・114頁)とで、傍点部の解釈が異なっているのは疑問である(『全註解』は両者とも「で」とする。私見ではいずれも「で」がよい。)等が挙げられよう。また、同じく細かな点において別解の成立し得る余地も、なお幾分か残されているようである。次には、そうした例をひとつだけ組上に載せて考察を加えてみたい。

A「さてもこの扇よ、誰がぞや。これ知らんや。さい、これ問へや。見たる人やあると、誰にも尋ねばや。(中略)と、かきつみとりつきたまふに、小宰相いとわびし。(巻六・56〜57頁)B日ぐらし、さまざまにこの事をのみ思しめしておはしますや。再々と仰せらるれど、せんかたなくて日も暮れぬ。(同・58頁)

C 宰相の君は、(中略)ただよきほどに従ひきこえて、「新大、新大」と三人起き臥せば、やうやうかれまさりながら、「宰相もたれ、三人寝たらん」などになり行けば、いとうれしくて、(中略)ただ従ひきこえて過しけり。(同・86頁)

卷六は、抑圧された情欲の捌口を同性愛に見出だすヒステリックな前斎宮の狂態を活写して、全篇中一際異彩を放っているが、右の諸条について言えば、Aは、五月雨小止みないある日邸内に落ちていた男物の扇に対し、異常な関心を示した前斎宮の言葉。Bは、その日一日の心昂る彼女の様子。Cは、前斎宮・宰相の君(Aの「小宰相」と同一人物)・新大夫による三女性同衾の日常を、宰相の君側から描写した部分である。叙述の都合上、まずはC部分ハ傍線部に注目する。ここは『全註解』が、本文を「さいもふたれ」(40頁)とし「意味不明」(40頁・【注釈】(45))としていたために、「いとうれしくて」以下の主語を「新大夫」とする錯誤を犯した箇所であるが、本書は、このうちの「さい」が「宰」(『小宰相』または『宰相の君』の略称)であることに鋭く気付き、ハ傍線部の意味するところが「宰相の君も居なさい」(現代語訳)であることを、見事に解き明かした。そして、この卓見を得て初めて、C部分の伝える真意が精確に理解できるようになったわけである。つまり、これまで前斎宮のお相手は専ら宰相の君が勤めていたのだが、ここへ来て新大夫なる女房が新たに寵愛を獲得したことにより、これをも呼び寄せて三人で起き臥すという事態が現出した。そして、そのような日常が経過する中で二女房の位置は漸次交替して行き(事に積極的な新大夫と、しぶしぶつき合っている宰相の君とを比較すれば、これは当然の成り行きであろう)、遂には、新大夫との同衾に「宰もふたれ」

と特に仰せがあって宰相の君も加えられ、三人で寝るという状況にまで変化した。その結果有難迷惑な寵愛から解放される時間が増え、宰相の君は「いとうれしく」思ったのである。(なお付言すれば、筆者はここに描かれた三女性同衾の姿を、前斎宮を中心とするレスビアン関係の過熱した痴態と判断するよりも、むしろ既にある一対一の関係が新たな一対一のそれへと移行する間の過渡的―即ちそれだけ不安定な―形態と見做す方がよいと考える。また、以上で述べたことは卷八末尾にある関連記事と合わせて再考されねばならない問題を含むが、その本文自体に解釈を再検討してみる必要がありそうなので、卷六の成立事情とも絡んで複雑となるので、今は置く。)

右に見たように、ハ傍線部中の「さい」が「宰」であることは最早動かし方がない。そこで、このことを念頭に置いてA・B両部分に立ち戻りそれぞれの傍線本文に目を向けると、どのような新解釈の可能性が生じて来るであろうか。初めにイ傍線部であるが、これには『全註解』が「相手を促す時に発する語か」。(393頁・【注釈】(1))、本書が「相手の語に対して肯定する発語」(【語釈】(1))と、各々注を施している。しかし、前者にはその確例がないようであるし、後者には近世語臭が甚だ強く、文脈から見て「相手の語」を「肯定」しているとは考えにくいこと等から、いずれも俄には従い難い見解である。私見では、これなどもやはり「宰」(『小宰相』の略称)と見做すのが妥当ではないかと思う。前斎宮は、「宰、ねえこの扇のことを訊いてみてよ。」と、小宰相のからだを「かきつみ」彼女に「とりつき」つつ仰せられたというのであろう。次いで口傍線部については、『全註解』が金子武雄氏説を踏襲して「細々と」か、『再

々と」か(394頁・【注釈】(30)と自説を保留しているのに対し、本書は「再々と」を採り「二度も三度も」と訳している。ここは前後の文章構造から考えて本書の如くに解せるならば、特に問題はないようにも思えるが、「再々と」という語形自体がやや不審である上に、これがC部分における「新大、新大」という言いまわしに酷似していることや、小宰相が前斎宮にとって一身同体の存在であったこと等を勘案すれば、口傍線本文も或は「宰、宰」と改めるべきかも知れない。そうすると、前斎宮は終日小宰相にとり纏って、「宰(ねえどうしよう)、宰(ねえどうしよう)」と性懲りもなくおっしゃっていたということになる。(ついでながら、両書とも直前の「おはしますや」までを一文と見て句点を付しているが、筆者はむしろ読点とすべきように思う。)そこでこれらの結果を纏めると、本書においては三様に解釈されている三箇所の「さい」は、結局同一の語義(つまり「宰」)に落ち着く可能性もあるという結論に達するのである。私見の当否は諸氏の御判断にお任せするとし、ともかくも、本書の成果を土台にかようその枝葉を修正して行くことが、今後『我身にたどる姫君』注釈上の課題となるであろう。

最後に、以上が甚だ不得要領の紹介に終始したことを著者に深謝するとともに、このあまり耳馴れない題名の作品が、恰も王朝物語の残滓であるかの如くに言われがちな一連の擬古物語群の中にあつて、質・量ともに傑出したものであり、何よりも生身の女の真実を描ききって出色の出来映えを示していることが、本書を通じて多くの方々に知っていただけのように祈念して、筆を擱くことにする。

(昭和五十八年四月十月 桜楓社刊 全七冊 各一二〇〇円)